



シリウス・グレイス

ジーク専属の騎士。
人間に囲まれて育った幼少期の
なかで、力の弱い人間のことを
卑怯に感じ、不信感を募らせている。

エリザ・グレイス

モニカ専属の侍女。
幼少期を人間の国である
エルセリアと近いドラクトルの
辺境で育ったため、
竜人だけ人間社会に
順応するために力を抑えている。
シリウスの妹。

ジーク・ドラクトル

エルセリアの隣にある
竜人の国ドラクトルの第一王子。
ドラクトルはこの世界で最も
古い国であり、竜人が魔術を
作り出したと言われている。

モニカ・ミュール

人間が治めるエルセリア出身の人間。
少しだけ気の強い至って
普通の善良な一般市民で、
田舎にある実家では
両親が定食屋を営んでいる。

Characters



Contents

プロローグ	004
第一章 嫌いなあいつと結婚!?	005
第二章 新婚旅行	051
第三章 疑惑の花嫁	100
第四章 ^{いにしえ} 古の契約	140
第五章 永遠の誓い	187
エピローグ	248
番外編① じゃじゃ馬な姫	250
番外編② ルドヴィガスの苦悩	255
番外編③ いつかの別れ	265



*Yogen ni yoru to goman fuson na ryujin no
otaiishi no tsuma wa watashi de
kimari no you desu!?*

プロローグ

「ふうー……」

緊張でバクバクする心臓をなんとか抑えながら、重い扉を押し開けた。部屋の中は暗くて心拍数がある一段階上がる。気配を感じて視線を向けると、広い部屋の奥、サイドランプに小さく照らされたベッドがあった。そこに腕組みをして腰かけている人物がいる。

「ふん、来だな」

私を見るその視線は鋭さ満点だ。私だって来たくないんだから。口に出したらなんだから負けな気がするから言わないけど。

「不本意とも言いたげだな。人間風情が」

思っていることは筒抜けだったらしい。その尊大な態度が初めて会った時から気に食わなかったのだ。

「私はそっちの都合に付き合っただけだ。ドラクトルの王子様？」

私も腕組みをして彼を見下ろした。本当は今すぐ逃げ出したい。だけど、もう後には退けない。だって結婚しちゃったんだから。

目の前の不遜な男、隣国の王子ジーク・ドラクトルと。

第一章 嫌いなあいつと結婚!?

エルセリアの文化都市セレスティアは交易が盛んで、周辺諸国から多くの人と様々な文化や知識が集まる。私、モニカ・ミュールが通う王立セレスティア魔術学園も多くの国から留学生を迎える実に多様性に富んだ学び舎であり、通う生徒は動物の耳としっぽが生えた獣人族がいれば年齢不詳なエルフもいる。生徒数の半分は人ならざる者で、残り半分は普通の人間。種族もそうだけど身分も様々で、庶民も貴族も皆同じ教室で学ぶ。セレスティア魔術学園は種族や身分に関係なく、その門戸を広く開いているのだ。

そんなセレスティア魔術学院に庶民の私が入学してから早三年。頭のネジが外れた人外や高くともっているお貴族様とも、ある程度仲良くなった。共に魔術を学ぶ者として研鑽しあえたと思う。ただ一人を除いて。

「僕に気安く話しかけるなよ。人間風情が」

ジーク・ドラクトルは初対面から最悪な男だった。クラスの人と仲良くなりたいと勇気を出して話しかけた私を、やつは鼻で笑って冷たくあしらったのだ。どう頑張っても理解し合えない価値観や考え方があると知った十六の春だった。

ジークは竜人が治める隣国ドラクトルの第一王子で、生粋の竜人だ。爽やかなライムグリーンの髪を後ろに撫でつけ、真鍮のような暗い輝きを宿した瞳は瞳孔が縦に細く伸びている。耳も先が尖って

いて、竜を人にしたらまさにこんな感じだろうなっていう見た目だ。元々竜人は気位が高い種族で、彼らの国ドラクトルはこの世界で一番古く歴史ある国だ。そして竜人は今やインフラとなった魔術を作り出したと言われている。そんなわけでこの世界を発展させ、歴史ある種族としてのプライドをお持ちなのだ。

そして例に漏れずジークも超ブライドが高かった。気位が高いと言えば少しは聞こえがいいけど、とにかくめっちゃくちゃ偉そうなのだ。

ジークとは一年生の時同じクラスだった。……思い出すだけでむかむかする。

「こんなこともできないとはな、人間」

「見ろ、この僕の力を。貴様のような人間には出せないだろうな」

やれテストやら魔術の実習やらでジークは何かと周りの生徒に偉そうに振る舞い、時には教師にまでその態度を見せつけていた。みんなやつの高貴な身分と綺麗な見た目であっさり受け入れていたけど、私はそう簡単に流すことなんてできなかった。負けじと言い返したし、敬う姿勢なんて一切見せなかった。

そんな私の態度が気に障ったのか、ちょっと私が失敗すればすぐ鼻で笑ってくるし、自分ができるところを見せつけてくるようになった。

悔しいのはやつが座学も実技も完璧で非の打ちどころが無いこと。私もかなり頑張ったけど、とても敵わなかった。だから言い返せなくて余計いらだちが募っていった。

あいつとクラスが分かれた二年生の時は毎日が穏やかで素晴らしかったけど、3年生でまたジーク

と同じクラスになった。クラス分けの紙が張り出された時の私の絶望は計り知れない……。その時近くにいたジークも嫌そうな顔をしていた。お互い最悪だと思ったことだけは通じ合えたと思う。

三年生になった私たちは流石に少しは成長していたから、大っぴらに言い合うことは無く……。

「貴様の魔術はミドルスクール止まりだな」

言い合うことは無く……。

「この三年間、何をやっていたのだ」

無く……。

「やはり貴様たちが僕ら竜人に敵うはずもないな、人間」

「黙りなさいよトカゲ野郎」

言い合うことは三回に一回くらいだった、と思う。

でもそんなストレスフルな生活ともあと少しでおさらばだ。時が流れるのはあつという間で、学園生活も残りわずか。残すイベントは卒業パーティーだ。皆思い思いに着飾って、それは華やかなパーティーになる。ジークは色んな女子たちに誘われてたけど、なぜやつに声をかけるのか意味が分からなかった。もっと優しい男子のほうがいいに決まってる。と言いつつ私にはエスコートしてくれるボーイフレンドなんていない。女子の友人と気楽に楽しむつもりだ。卒業パーティーが終われば、田舎に帰って実家の料理屋で働く。この学院で学んだ魔術で、少しでも両親の店を助けられたらいいと思う。

この三年間色々あったけど、なんだかんだ楽しかった。腹立たしいあいつのことも、今思えば貴重

な体験だったのかもしれない。だからと言っても二度と近づきたくはないけど。



「卒業してもたまには会おうねモニカ」

「もちろん！ 店が休みの日はこっちに出てこれると思うから」

豪華な食事と華やかな音楽。今までの人生でこんなパーティーに出たことは無かった。ご令嬢たちが着ているような流行りのドレスじゃないけど、今日は私もドレス姿だ。両親がお祝いに用意してくれた淡いピンクのかわいいドレス。ドレスを着れると思っていなかったのが本当に嬉しかった。多分これが人生で最初で最後のパーティーになるだろう。もとはしがない庶民なのだ。この光景を目に焼き付けて、一生の思い出にしよう。

音楽隊を眺めて感傷に浸っていた時、突然入口が騒がしくなった。

「げっ」

見ると、シンプルな黒のスーツを着たジークが入場したところだった。後ろには従者を引き連れている。あれだけ女子から誘われていたのに彼はつれない態度で全て断っていた。王族だからこそしがらみがあるのだろうか。そもそもパーティー自体参加しないのではないかと思われていた中、突然の登場にあつという間に大勢の生徒が集まった。

「何がいのよあんなやつ」

「竜人なんてセレ学以外で会えることなんてそうそうないし、王子様だよ？ みんな思い出作りたいんだよ」

「そういうもの？」

もう卒業して会うことは無いっていうのに。いや、だからこそなのか。一人で納得していると突然照明が落ちた。

「なっ、なに!？」

辺りは真っ暗になり、生徒たちもざわついている。何かのサプライズだろうか。すぐに明かりは戻った。

ただの停電かと思っただけど、何か違和感があった。

トークショーとかが行われるステージ上に、先ほどまではいなかったおじいさんが立っていた。真っ黒なローブと顔を覆うもじやもじやの白いひげ。目元が辛うじて見えるくらいだ。そしてその目は開いているのかわからないくらい細い。こちんまりとしてて、平均身長の私より背が低そうなのにすさまじい存在感がある。

「あんな人いたっけ？」

首をかしげて聞くと、友人も知らない様子だった。

「いや……先生にもいなかった気がする。魔術師っぽいカッコしてるけど」

おじいさんは背丈の二倍はある立派な杖を持っていた。

「ふおっふおっふお。我は預言者ルドヴィガス。次期国王ジーク・ドラクトル様にまつわる預言を運

びに、ドラクトルより参った」

「預言者ルドヴィガスって、あの伝説の？」

「絵本の話じゃないのか」

「ジーク様の預言って言ってた？」

闖入者に生徒もざわつき始める。

預言者ルドヴィガスは、誰もが幼い頃に一度は読むドラクトルの冒険譚に出てくる登場人物だ。曰くルドヴィガスの預言は外れない。例外はなく、もしその預言に逆らえば必ず良くないことが起きる、というただのおとき話だ。五百歳を超える伝説の預言者の現実味のない名前に、何かの余興かなという空気が流れ始めた。

「だっ」

後ろで呻き声が聞こえて振り返ると、ジークが思いつきり眉をひそめていた。まるで厄介なことになったみたいだ。初めて見るジークの表情に気を取られていると、おじいちゃん、もとい預言者ルドヴィガスの声が会場中に響き渡った。

「今から告げる特徴を持つ者が、次期王妃、つまりジーク様の妻となる者である」

今日一番の女子たちの悲鳴が上がった。ジークにするにはあまりにもナンセンスな話題だ。一気に預言者の信びよう性が高まる。

「名がモから始まり、姓がミュから始まる……」

「まあ！」

その瞬間ある女生徒に一気に視線が集まった……もちろん私ではない。確かに私は名がモから始まり、姓がミュから始まるモニカ・ミュールだけど、実はもう一人いるのだ。

エルフのプリンセスであるモナ・ミュラーだ。

彼女はエルフということもあってまるで作り物のような美しさと強大な魔力量を持ち、全生徒の憧れだ。名前が似ているから時折比較されてはちよつとだけへこむなんてよくあることだった。

今回も私じゃないだろうなと全くときりもしない。彼女であれば竜人のジークとも釣り合うだろう。納得の雰囲気の流れ始めた。

「……お似合いの二人じゃない」

そうつぶやいたけど、なぜか胸の奥にチクリとした痛みが走った。

「コルセットきつすぎたかな」

私は胸の辺りを撫でさすった。

だけど、預言はそこで終わリじゃなかった。

「今日淡い桃色のドレスを着ている者である！」

「淡い桃色のドレス……じゃない!？」

再び周囲がざわつき始めた。

モナが着ているのは深紅のセクシーなドレスだった。

もう少し薄めれば……淡い桃色だったかもしれない。

嫌な予感がした。

「モニカ……あんだ」

友達が目を見開いて私を見ている。それ以外の視線も徐々に集まるのを感じる。私は冷や汗が止まらなかった。自分が着ているものを恐る恐る見下ろす。両親が私のために選んでくれたかわいらしい淡いピンクのドレス。名がモから始まり、姓がミュから始まる……

「嘘でしょ……」

見たくない。本当に見たくないけど、私は恐る恐る後ろを振り返った。

「貴様と僕が……？」

これまた今まで見たことのないような驚愕の顔を浮かべているジークと目が合った。

「なお、この条件を満たす者以外を娶った場合、未曾有の危機がドラクトルを襲い、それは周辺の国々にも及ぶであろう。以上！ ふおっふおっふおっ！」

おじいちゃん預言者は言うだけ言うと、キラキラと光を残し一瞬で姿を消した。

その瞬間、会場は阿鼻叫喚あびきょうかんに包まれた。

それからは怒涛の勢いだった。おじいちゃんの適当にも思えるヘンテコ預言によって、私の人生の行く末は決まってしまった。

私の両親への説明がいつの間にか済んでいて、ばばっと別れの挨拶をさせられると、そのままドラクトルに連れていかれた。ドラクトルの国王王妃両陛下にばばっと挨拶を済ますと、名門セレスティア魔術学園も真っ青なスパルタ花嫁見習い生活が始まった。衣装を用意するために採寸で一日中拘束、

その合間に最低限の教養を叩き込まれ強制的に王太子妃としての形を整えられていく。ヘロヘロになりながら毎晩泥のように眠った。

そうして気づけば、あっという間に結婚式当日だった。

この日のために用意された純白のドレスは、職人が一針一針丁寧に縫い付けた宝石が輝いている。このドレスだけで一族が生涯暮らせそうだ。

侍女に連れられてブライズルームを出るとジークが待っていた。ドラクトルに来て一か月、ジークと顔を合わせたのはこれが初めてだ。彼は一目で上等な布だとわかる純白のモーニングを着ていた。だけど、その顔はしかめっ面である。私も同じような表情をしていたに違いない。

お互い言いたいことが山ほどあるけど、ここまで来てしまえばやるしかないのだ。ジークが無言で差し出した腕に、ローブを付けた腕を絡ませる。布を通してたくましい筋肉を感じて、心臓が一瞬ときりとねた。

ジークが歩き出したのでそれについていく。大きな扉の前に立つと、恭しくお辞儀をした騎士が扉を開け放った。

「！」

想像以上に大勢が参列していた。右を見ても左を見ても私たちを見る多くの目。きっと私は品定めをされている。ここにいる全ての人が偉い人に見えて、無意識に体が固まる。自分が正しく歩いているのかもわからない。それでも神父様のもとまでとり着けたのは、ジークが危なげなくリードして

くれたからだ。

神父様の前で誓い合い、ジークと向かい合うとヴェールをめくられる。顔が近づいたと思ったらあっさりキスをされた。そしてジークにつれられて場所を移動し大きな扉が開け放たれると、そこはバルコニーだった。眼下にはこの日のために集まったドラクトルの国民がひしめいていた。

「ジーク様！ 万歳！」

「ご結婚おめでとうございます！」

歓声が飛び交う。

流石は王太子で、ジークは慣れた様子で国民に応えていた。私はと言えば、現実味の無さに何も考えられなくて、ただただこの状況に圧倒されていた。途中でジークの腕にがっかりと掴まっていたことに気づき、バレないようにそろりと力を抜いた。

その後晩餐会があり、それはそれは豪華なものだったが、食事は全く喉を通らなかった。重いドレスを脱いで部屋に戻り、一人になった時によりやくじわじわと現状を把握しはじめた。

本当に結婚してしまった。あのジーク・ドラクトルと。そして今日は初夜だ。この後の展開は考えなくなかったけど、無慈悲にもドアがノックされた。そろそろと侍女たちが入ってきて私の体を隅々まで洗い始める。他人に体を洗われるなんて物心ついてからは初めてで、精神的にげっそりしてしまった。そして洗い終わった私に控えめなフリルのついた白の夜着を着させた。

そして心の準備をする間もなく、気づけばジークの部屋の前に立っていた。ここまで連れてきてく

れた侍女もいつの間にかいなくなっている。ここから先は自分で行くしかないのだ。

部屋の中は暗くて、ベッドサイドのランプだけが頼りだった。お化け屋敷でもないのに、心臓がずっと変なね方をしている。落ち着きたいのに落ち着けない。

「ふん、来だな」

ネイビーのシルクシャツを着たジークがベッドに腰かけていた。

いつもは後ろに撫でつけているライトグリーンの髪は下ろされていて、年相応に見える。

「不本意とも言いたげだな。人間風情が」

ジークが嘲りを込めて笑ってきた。その尊大な態度が、初めて会った時から気に食わなかった。だけれど今は、どこか安心した自分がいた。結婚式や晩餐会、国民の前ではまさに次期国王の顔で、私の知らないジークだった。この国で知り合いはジークだけなのに、一人取り残されたような気分だった。だからいつもの不遜な態度のほうがまだマシだ。

「私はそっちの都合に付き合っただけなのよ。ドラクトルの王子様？」

私も負けじと言いつつ返したけど、いつもならすらすらと出てくる言葉の応酬も、今日はきこなくなっちゃった。

「この結婚はドラクトルだけのものではない。貴様らの国の安寧のためでもあるのだから。思い上がるなよ」

口をへの字にしてジークが睨みつけてくる。

そうだ。もしドラクトルの危機を回避することだけが目的だったなら、私もここまで大人しく来な

かった。ドラクトルだけじゃなく、周辺の国々、つまり自分の国にも危機が及ぶかもしれないのだ。大好きな家族や友達がいる私の国。その平和がこの結婚にかかっているとあれば、逃げるといふ選択はなかった。そもそもただの庶民が逃げられるとは思っていなかったし。

私は別れの時の両親の顔を思い出した。もう簡単には会えなくなる娘に、両親は料理屋の名物料理をたくさん持たせてくれた。私が乗った馬車を地平線の向こうに消えるまで見送ってくれた。

「お父さん、お母さん……」

いけない、寂しい気持ちで湧いてしまった。こんなに弱気じゃダメだ。ジークのことは初めて会った時から好きだったと両親には言っているから、娘は幸せな結婚をしたときと思ってくれているはずだ。

「何を考え事をしている。こっちに来い」

ぼーっとしていたらジークが自分の隣をポンポンと叩いた。

「言われなくても行くわよ！」

言い返しながら拳五個分空けて隣に腰を下ろした。

「貴様は不本意極まりないだろうが、この僕の妻となれたことは貴様にとって最大の幸運だ」

「わ、私だって……」

私だってあんたにとって最大の幸運だって言ってるやなかったけど、できなかった。学園では対等だったとはいえ、王太子とじゃない庶民だ。ジークも心の中では私じゃなくてモナ・ミューラーが良かったかと思っているかもしれない。こいつに申し訳ないなんて思う義理はないけど、預言を言い渡さ

れてからずっとこんな考えが拭えなかった。

「わっ！」

私が黙った隙にジークの長い腕が腰に回った。強い力で引き寄せられる。

「夫婦となったからにはこれから短くない時間を共にするのだ。僕は貴様のことを見事に慈しんでみせよう」

「んっ！」

顎を持ち上げられ、人生で二回目のキスをされた。

重ねただけの唇が一瞬離れると、再び覆いかぶさってきた。今度は私の唇を食むように啄んでくる。

「ん、んん！」

「……はあ、あいな」

ジークは一旦唇を離すと呆れたようにため息をついた。

「式の時もそうだったがこういう時は目を閉じろ。全く色気のない」

「だ、だってそんなの知らない、あっ」

大きい手が顔面に迫ってきて、視界を覆った。

ひんやりとしていて、ほのかにソーブの香りがする。私と同じ匂いだ。なぜか鼓動が早くなった。

「力を抜け」

「んっ、なに、んう」

薄く開いていた口に柔らかいものが入り込んできて、舌や頬の内側を撫でていく。舌と舌を絡ませ

て音を立てて吸われて、体から勝手に力が抜けた。目を覆われて何も見えないから音に敏感になってしまふ。助けを求めようとして伸ばした手がジークの胸辺りに当たった。つるつるとしたシルクの下
の硬い筋肉の感触が指に伝わってくる。私はシルクがしわになってしまふのも忘れてぎゅっとなん
だ。

そろそろ息が苦しくなってきた頃、ようやく視界が明るくなった。水音を立ててジークの唇が離れ
ていく。

「はっ、はあ、はあ」

私は息があがってしまったけど、ジークはいつもの涼しい顔だ。どうしてそんなに余裕そうなの？

「上がるぞ」

「きゃっ!？」

腰に回された腕でベッド上に引きずり上げられる。ルームシューズを脱がされてそろえもせずによ
いッとして投げ出された。

ジークはベッドの上であぐらをかいて私を横抱きになると、キスをしようとまた顔を近づけてきた。

「ちよっ、ちよっと待って!」

私が慌てて手のひらでジークの口を覆うと、ジークは不満そうに眉をひそめた。

「なんだ」

「そ、そんなにする必要ある？ さっさと先に進めてよ」

至近距離で真鍮の瞳と目が合う。縦に細い瞳孔は、目の前の人物が人間ではないことの証明だ。彼



には私の丸い瞳孔が見えているはずだ。私もまた竜人とは違う生き物なんだ。

「はっ。このくらいで音を上げていては先が思いやられるぞ人間。いいから慣れろ」

「あっ、ま、んう」

固く引き結んだまま力が抜けない唇を、ジークの唇が解きほぐすように優しく食んでくる。

私は諦めて今度はちゃんと目を閉じた。しばらくそうされていると、だんだんこの状況に慣れてきた。

「ふっ、う、んん、あ」

相変わらず心臓はうるさいままでけど、少しだけ別のことに意識を向ける余裕ができた。薄目を開けると見える天蓋、窓から差し込む月明かりできらめくほこり、ジークの呼吸する音。キスが結構気持ちいいこと。

「やっと大人しくなってきたな」

目を開けるとジークがいつもの気に食わない含み笑いをしている。

「なによ」

さっきからずっと私は静かだったはずだ。いつもみたいにやり返したいけど恥ずかしくてできないんだから。

「その調子で僕を受け入れろ。貴様は僕のことを拒んではいけない。僕も貴様のことを拒まず全て受け入れる。ほら、腕を上げろ」

「ぎゃっ」

いつの間にか前開きの夜着のボタンが全て外されていて、胸当て付きの白のキャミソールが晒^{さら}されていた。これを脱げば全部見えてしまう。一気に身体中の血が顔に集まった。

「あんたにしてもらわなくても自分で脱げ……」

そこまで言いかけてふと思った。ここまでずっとジークのペースだ。遙か遠い外国まで来たっていうのにいつまでうじうじしてるのよ、私！

「ほら、早くやりなさいよ」

私は勢いよく腕を上げた。

「……くっ、くく」

私の覚悟とは裏腹にジークはこらえきれないと言わんばかりに笑った。

「っ！」

どうしよう、逃げ出したいくらい恥ずかしい。

「ご協力感謝する」

骨ばったひんやりとした手がお腹に滑り込み、キャミソールを脱がしていった。

「っ」

顔に熱がこもっていくのを感じる。どこを見ればいいかわからなくて、私はジークの首元を見た。浮き出る血管や喉ぼとけに視線を集中させる。

私の体を見て、ジークはどう思うだろうか。胸は控えめだし、くびれもあんまりない。お腹は触ればぶにぶにしている。モナミたいな豊満さもセクシーさもない。急に悲しくなってきた。

「ふ、うう」

涙がにじんだけど、食いしばって抑えた。ここで泣くなんてもっと恥ずかしすぎる。胸を腕で隠しそうになって、シーツを掴んで耐えた。

「……」

ジークは無言だ。私はまだ彼の首元を見続けているから、彼がどこを見てるのか何を考えているのかわからない。もういつそ何か言ってほしい。

「フェアじゃなかったな」

そう言うときジークは自分の夜着にも手をかけてするりと脱いだ。

「きゃっ」

鍛えられた体は均整の取れた美しさだった。いつも見ていた制服姿とのギャップに頭がおかしくなりそうだった。

「はっはっはっ」

そんな私の葛藤を知りもせず、ジークは裸になった上半身を見せてふんぞり返っている。なんでも少し嬉しそうなのよ。この男はどこまでも自分に自信があるようだ。腹立つけど、おかげで恥ずかしさが和らいだし涙も引っ込んだ。

「お綺麗な体なこと」

「そうだろう。触ってもいいぞ」

ジークは私の手を取ると自分の体に這わせた。誘われるまま恐る恐る撫でてみると、硬いけど少し

柔らかい。私の肌とはまた違う質感だった。これが男の人の肌なのか。

ふとジークを見ると、自分で触らせたくせに彼の頬はほんの少しだけ赤らんでいた。

「ちょっと、何照れてるのよ」

「僕も触るからな」

「ひゃっ」

ジークの両手が私の脇腹を掴んで、すべすべとさする。両手は上に移動してきて、私のささやかな胸のふくらみを包み込んだ。感触を楽しむように揉まれ、私の意思に関係なく胸は形を変えた。

「くすぐった、ひ」

身をよじると、そのまま押し倒された。

視界全部がジークになって、腕の中に囲われる。

「うう、ふ」

「まあ悪くはない」

「悪くはないって何よ！ やっ！」

胸を揉みしだきながら、長い指が先端を掠めてくにくにといじった。

気持ちいいのかわからないけれどむずがゆさに体が勝手に逃げようとする。

なだめるようにキスをされた。これなら慣れている。目をつぶっていられるし、ジークでいっぱいになって他のことは考えなくて済むから。

少し余裕が出てきて、私からもジークの唇を食み返した。

「！」

一瞬ジークの動きが固まった。してやったりとほくそ笑んだが、仕返しとばかりにキスを深くされた。

「んんっ、あっ！」

胸を這っていたジークの手がそろりと下に向かい、ズボンの中に入り込んできた。そしてパンツと一緒にあっけなく取り払われ、いつの間にか生まれたままの姿になった。

露わになった私の太もを大きな手が撫で、誰にも見せたことのない秘所へと伸びた。

「ああっ！」

爪の整った美しい指が、突起をとらえた。とんとんと叩いたり、縦に横にこすられる。

「ふっ、うう」

全身が発火したみたいに熱くなった。どうしてこんなことになっているんだろう。同級生にすごい所を触られている。きつと一国の王子はそういう教育も施されてきただろうし、女子にもモテモテでめくるめく薔薇色な経験をしてきたことだろう。

でも私は違う。十八年生きてきて、異性とキスどころか手をつないだことすらなかったのに。それに、誰かを好きになったこともなかった。知識としては知っていても、こんな経験初めてだ。色んな段階を飛び越えている気がする。

「おい、何を考えている」

「だ、だって、こんな、私」

いっばいいいばいで言葉が出てこない。はくはくと口だけが動く。

「余計なことは考えるな。これはやましいことではない。我がドラクトルの未来が懸かった、僕たち夫婦の尊い行為だ。……少し湿らすか」

ジークは私の突起をいじっていた人差し指を口元に持っていくと、ためらうことなく自分の口に含んだ。

「なっ、なにやって！」

「貴様のためだ。すぐに良くしてやる」

唾液を纏って指先はいやらしく照っている。それで突起をいじられると、さっきまでなかった感覚が私を襲った。滑りの良くなった指が責めたててきて、意識をそらそうにももう片方の手は胸を絶えず揉んでいるし、ジークの唇が顔や耳にキスをしてくる。

「やっ、も、もういいから」

「よくない。まだ貴様の準備が整っていない」

突起をいじっていた指が、入口の周りをなぞりだした。

「ひっ」

こらえきれなくて、いよいよ私は泣き出してしまった。涙を見られなくてぎゅっと目を閉じる。ジークの指先は入口をマッサージするみたいに優しくなぞっている。彼の唾液が私の分泌液なのか、ぬるぬるした感覚があった。そしてとうとうゆっくりと私の中に指が差し込まれた。

「うっ」

「そのまま力を抜いている」

そんなこと言われたって、自分でも触ったことが無いのに、どうすればいいかわかるはずない。

それでも自分を落ち着けようと、息を深く吐いた。

「ふっ、その調子だ」

「う、あ、ああ」

長い指がゆっくりと抜き差しする。力を抜くことに必死で、気持ちいいのかは全く分からなかった。ただただ圧倒的な違和感に体が勝手に逃げようとする。

「一本増やすぞ」

「んっ」

中がさらに広げられる。内側からとんとんと押したり、緩急のある抜き差しに、腰がひどく疼きはじめた。いつの間にか私の秘所はずぶずぶ音を立てていた。

このままじゃおかしくなりそうだった。

「ねえ、もういいからっ！ 早く」

「せっかちなだ。まあこのくらいでいいだろう。お望み通り終わらせてやる」

「ひっ!？」

ジークがズボンに手をかけると、勢いよく猛ったものが出てきた。

涼しい顔をして下半身がこんなことになっていたなんて。そしてあまり色気のない自分の体でも反応してくれたことに、胸をなでおろした。

「……あまり見つめてくれるな。溶けてしまう」

「み、見てないわよ!」

反射で言い返したが流石に見てないは無理がある。

「本当に貴様は、いつもこの僕に口答えをするな」

「あんたのほうこそその偉そうな態度どうにかならないわけ!? 初めて会った時からずっと気に食わなかったのよ!」

恥ずかしさも相まって私は思わず強めに言い返してしまった。

「大体貴様は竜人の尊さがまるで分かっていない」

「自分たちが世界の中心だって思ってるんでしょ。人間だってねえ」

お互い全裸でベッドの上で、なんとも情けない口論だ。

「ああっ、もういい……こんなつもりじゃなかったのに」

ジークがわしゃわしゃと前髪をかいてボソボソとつぶやいた。

「今に黙らせてやる」

「あっ、ちょ」

私の太ももに手をかけると、大きく広げられた。私の恥ずかしいところが全部見えてしまって、羞恥が舞い戻ってくる。

「挿れるぞ」

ジークは先端をびしょびしょになった入口に擦り付けると、ゆっくりと楔を打ち込んだ。

「はっあ、んんっ、くるし」
「ぐっ」

存在感がある熱が一気に入り込んできた。ジークが丁寧にほぐしたおかげか痛みは少なかったけど、それでも内臓を押し上げられるような異物感に生理的な涙が込み上げる。

ジークは眉をひそめて、余裕の表情をほんの少しだけ崩した。

「ふう、力を抜け。動くぞ」

「あっ、んっ」

腰が打ち込まれるたび、ベッドがギシギシと音を立てる。

本当にジーク・ドラクトルとセックスをしている。なんだか他人事ひとごとみたいにして、意識がどこかに飛んでいきそう。

「んん、くるしっ」

ふと横を向くと、私の顔の横についているジークの腕が目に入った。筋や血管が隆起して、何か力を込めてこらえているみたいだった。

「あ……」

ジークを見ると苦しそうな顔をしていた。もしかして私が力を抜けないせいで痛いのかもしれない。思わずその造形の整った顔に手を伸ばしていた。揺さぶられながらその頬を触る。

「ごめん、いたい？」

「うっ」

ジークは一瞬目を見張ると、もっと苦しそうな顔になってしまった。本当に痛いのかもしれない。自分からは言い出せなくて辛いのであれば、やめてもいいと言ってあげようと思った。

「痛いわけ、ないだろ」

「んっ！」

ジークは私の手首を取ると手のひらにキスをした。まるで心から慈しまれているみたいな行為に、腰がぐんと重くなって、胸が締め付けられるように痛くなった。

「それを言うなら貴様のほうだろう」

「私は平気」

「無理はするな。だがこの僕が貴様ごときに怖い思いをさせることはあり得ない。安心して身を委ねるんだな」

ジークはキスをした手に指を絡ませてきた。愛し合っている恋人みたいなつき方が、私たちの関係となんともちぐはぐだ。だけど嫌ではなかった。そう思った瞬間、お腹の中心がゾクゾクと快感を拾いはじめた。

「んっ、ああっ、あああ、ちょ、ちょっとまって」

私の言葉とは裏腹に、ジークは腰の動きをどんどん速くしていく。抱きしめられて、私は身を振ることもできずにジークの背中に縋った。

「貴様は幸運な人間だ。僕以上に夫として妻を幸せにできる者などいない。貴様が望めば、いや望まなくても、富も、名声も、そして僕の愛も、全て手に入るのだから」

「あ、あつ、ん、はげしいよ、ゆっくり」

「この僕が治める国は繁栄し、僕たちの子供は幸福な人生を歩むだろう。千年も万年も栄華を誇り続ける」

私の耳に唇をつけながら、息の上がった声でジークが囁いてくる。

「なっ、に言って」

「そして貴様は一生涯僕のことを愛し続け、僕の隣にいるんだ。わかったか」

「わ、わかつ、た」

「僕のことを愛すると言え！」

「ああっ！」

深く腰を打ち込まれ、一瞬意識が飛んだ。全身がブルブルと震える。こんな感覚知らなくて怖かった。

「あ、あいす……」

息も切れ切れに言った言葉だったけど、それを聞いたジークは小さく口角を上げた。

「その言葉違えるなよ。……はあ、僕もそろそろ限界だ」

挿入が激しくなる。私は漏れ出る喘ぎ声を止めることができなかった。

「あつ、んっ、ジーク」

「ふっ、う、僕の子種を全て受け止めろ」

ジークが低い声で唸って、中の物はひとときわ熱く大きくなった。ジークは最後の一滴まで奥に擦り

付けるみたいにくいぐいと腰を打ち付けると、ようやく引き抜いた。喪失感を感じるくらい、さっきまで腹に入っていたジークは私に馴染んでいたらしい。

「ん……んう」

まだ意識がはつきりしていないところに、ジークが深いキスをしてきた。私ももう何の抵抗もなくそれを受け入れて、自分からも舌を絡ませる。ふわふわと気持ちがいい。

長いキスが終わると、ジークは私の隣に横になって抱きしめてきた。あったかくて、安心して、私はゆっくりと瞼を閉じた。

瞼の裏の明るさと鳥のさえずりに私は目を覚ました。

「んっ、んん」

目がしょぼしょぼして、ごしごしとこする。

「やっと起きたか」

「!?」

声に驚いて横を向くと、立てた腕に頭を預けたジークが私を見下ろしていた。毛穴の一つ一つが見えるくらい近い。

「なっ、なんで！」

「昨夜のことをもう忘れたのか、おめでたいやつめ。それで、体は辛くないか」

起き抜けに美しい顔が至近距離にあったって混乱してしまったけど、冷静になって昨日の夜のことを思

い出した。

「うっ」

あんなに毛嫌いしていたジークと昨夜……。

思い出したくないけど、雰囲気になされてすごいことを言った気がする。というか裸だったはずなのにいつの間にか下着も夜着もしっかり着ている。

途端に顔が蒸発した。

「くっつ、そんなに顔を赤くして。昨夜どんないいことがあったのか僕に教えてくれないか」

「あっ、あんたねえ！」

にやにやと私を見ているけど、ジークも大概とんでもないことを言っていた。恥ずかしさで言えば百倍ジークが勝っているはずだ。

「この僕をあんたなどと呼ぶな。昨夜はあんなに甘い声で僕の名を呼んでくれたというのに」

「だったら私の名前もちゃんと呼びなさいよ。貴様でも人間でもないんですけど!？」

そっちだって一度たりとも私の名前を呼んだことは無かったくせに。ここまで来ると知らない可能性もある気がしてきた。ふん、と顔をそむける。

「ああ、拗^ずねたのか？ こっちを向け、モニカ。僕の妻」

「えっ」

驚いて振り向くと、ジークはいつもの意地悪な笑みなのにとこか優しさが混じったみたいな顔をしていた。

「私の名前知ってたんだ……」

「僕をなんだと思ってるんだ」

ジークは呆れたように一つため息をつく、私の手を取ってキスを落としてにやりと笑った。

「君は僕を愛すと言ったからな。その言葉に違うことが無いよう、せいぜい励めよ」

言ったというかわざされたんだけど、それを口に出せないくらいジークは真剣な顔をしていた。

一つのへんてこな預言によって、私の人生は百八十度変わってしまった。それはジークも同じだ。

この先何があろうと、きっと私は彼から離れられないし、彼も私から離れられない。未来の果てしなさに私は恐ろしくなった。掛布の中に逃げ込むと、大きな体がいたずらするみたいに掛布の中でぎゅっと包み込んできた。

その頼もしさになぜか勝手に涙がにじんできて、私は気づかれないように厚い胸に縋り付いた。

もしかしたら、なんとかやっていけるのかもしれない。辛い思いをするかもしれないけれど、楽しいことも沢^{たくさん}山あるのかもしれない。そう思った。



それは考えもしないことだった。

「名がモから始まり、姓がミュから始まる……今日淡い桃色のドレスを着ている者である！」

僕を振り返ったあいつの顔は盛大に引きつっていた。

類まれなる魔力と技術を持ち、生まれながら王になる運命にあるこの僕の伴侶は、よりによって生意気なクラスメイトだった。

「ルドヴィガスめ、これを聞かせるためにパーティーに行けと言ったのか」
衝撃でしばらく僕は身動きできなかった。

卒業パーティーなど別に興味がなかった。将来の相手を見ついたり未来を誓い合ったりするイベントは、僕にはなんの関係もない。

いずれ国のために見合う女と結婚するのだ。

なのにルドヴィガスが突然現れたのはパーティー前夜のことだった。

「ジーク王子、明日のパーティーに出席されよ」

「いきなり現れてどういうつもりだ」

「老いぼれの言うことは素直に聞いておくのがよろしい。ふおっふおっふお」

「あっ、おい！」

白い口髭を揺らしながら、言うだけ言ってルドヴィガスは消えた。

「……なんなんだ」

ルドヴィガスの預言は絶対だ。国を左右してきたのを間近で見てきたからこそ身に染みて理解している。

そもそも人間の国にあるセレスティア魔術学園に入学したのもルドヴィガスに言われたからだだった。

理由を聞いても答えてくれず、竜人以外の文化にも触れるということかと考えて渋々入学した。

「はじめまして！ 私はモニカ。これからクラスメイトとしてよろしくね」

「……」

入学早々、人間の女が話しかけてきた。

僕は一瞬間まってしまった。次期国王として敬われ畏れられてきた僕に、このように話しかけてくる者などいなかった。

初めての経験に僕は思わず眉をひそめた。この人間には僕の耳が見えていないのか。

「僕に気安く話しかけるなよ。人間風情が」

「……へ？」

「初対面で馴れ馴れしい。僕を誰だと思ってる」

「……もちろん知ってる」

僕をドラクトルの王太子と知りながらあの態度とは、この女とは関わるまでもない。自分の席に戻ろうとした時、後ろから肩を掴まれて思いつき引っ張られた。

「なっ!？」

「あんたがとんでも高慢ちき男だってことがね!!」

「こっ、高慢だと？」

「どっかのお偉い方知らないけど、この学園じゃみんな対等なのよ。この偉男!」

「えらお……」



開いた口も目も塞がらなかった。なんて無礼なんだ。

まあいい、僕の力を知らないだけの哀れな人間。実力を見せればたちまち僕を畏れ崇めるはずだ。僕への態度も今に悔い改めるだろう。もうすでに遅いが、ひざまずいて許しを乞うなら考えてやらな
いこともない。

生意気なあの女が泣いて詫びるのを想像して僕は一人ほくそ笑んだ。

そのチャンスはすぐに訪れた。校庭で行われた魔術演習の授業で、僕は教師に手本を求められた。
遠くにある的に向かって魔力を当てるという、定番の基礎練習だ。

「はっ」

僕は魔力を放ち、並んだ十の的全てに同時に命中させた。この的当ては集中力と魔力の精密な制御
が求められるため、通常なら二つ、三つ同時に当てられれば上等だ。僕にとっては何が何個増えよう
と造作もないことだが。

教師を含めて周囲は騒然とした。瞬く間に拍手が巻き起こる。だがそんなことはどうでもいい。僕
は生徒たちの中に視線をさまよわせた。

「ふっ、どうだ。これであいつも……なっ」

僕の圧倒的な魔術を見て怯むか恐れ慄くかと思っていた女は、おの歯を食いしばって拳を握り、心底悔
しそうな顔をしていた。悔しがるというのは自分にもできると思っている者の反応だ。はなからでき
ないと思っていれば羨望か畏怖の念が湧くはず。

まあいい。思っていた反応とは違ったが、これで僕の実力がわかっただろう。あいつが頭を下げに

くるのが楽しみだった。

しかし、僕の期待は翌週の授業で見事に裏切られた。

「……なんだと」

女は僕が先週やった同時的当てをやったのけたのだ。啞然としていた僕を振り返ると、女はニヤリと笑った。

「あの女……!」

そうして僕とモニカの静かな戦いの日々が幕を開けた。

実技はもちろん座学でも、まるで互いに挑みかかるように成績を競った。僕が完璧に実技演習をこなせば、翌週には同じことをやってみせる。試験では当然僕が一位だが、毎度ギリギリだった。

正直僕が使う魔力は本来の力の十分の一にも満たない。全力を出せばこの学園は吹き飛んでしまうだろう。それでも、これならできないだろうと思うラインを、どうにかこうにかして越えてくる。意地でも負けない彼女に僕も躍起になった。

そして僕は彼女と競い合うことをいつの間にか楽しんでた。当初の謝らせたいという目的を忘れて。

「僕は何をしてるんだ」

それに気づいた僕は軌道修正を図ることにした。

何をしていても負けてくれないのなら、僕が負ければいい。

一年生も後半に差し掛かり、魔術演習の授業に試合が組み込まれるようになった。

「あんた、私と組みなさいよ」

「……いいだろう」

案の定向こうから勝負を仕掛けてきた。試合は相手の胸元につけたブローチに魔力を当てて落とせば勝ちというルールだ。

「それでは、試合はじめ!」

教師の号令を合図に、あちこちで魔力を撃ち合い始める。

「いくわよ……はっ!」

彼女が放った魔力を、体を小さく捻って避ける。

「そんな速さで僕に当てられるとでも?」

「くっ、外したか! まだまだ!」

彼女から繰り出される魔力を、魔術を使わないで避けていく。時折僕も彼女に向かって魔力を放つ。

「余裕そうな顔して……!」

なかなか魔術が僕に当たらずやきもきし始めたのか、攻撃の手を強め始めた。

そろそろ頃合いだ。僕は一瞬その場で足をよろめかせた。

「もらった!」

それを彼女が見逃すはずもない。渾身の一撃を真っ直ぐ僕の胸元のブローチへ放った。

「かかったな」

しかし、それは僕のブローチには当たらなかった。
僕が体勢を直さないでわざとそのままよろけたからだ。

「えっ！」

彼女が放った魔力に、僕は自分から当たりにいった。こめかみに痛みが走る。

勝負をしても彼女は絶対に諦めず僕に勝ちにくる。それなら、僕に傷を負わせてやろう。

次期国王である王太子の僕に傷をつけたとあらば、彼女も流石に怯むはずだ。そして泣いて詫げるのだ。こめかみからぬるりと温かいものが流れてくる。この程度の傷を止血するくらいなら治療師がいなくとも自分でできるが、これも演出だ。

どんな顔で僕のことを見ているのか、なんと行って謝ってくるのだろうか。釣り上がる口元を抑えつつ、僕は彼女を見た。

「っ！」

彼女は目を見開いて僕を見ていた。その顔は僕が求めていた驚愕の顔だったはずなのに。彼女はしばし固まり、そしてはっとした表情をしたかと思うとこちらに駆け寄ってきた。

「大丈夫!?」

彼女が必死そうなのはいつも見ていたが、こんな顔は見たことがなかった。

「止血、止血しなきゃ……」

彼女はポケットから取り出したハンカチを背伸びして僕のこめかみに押し当てた。その手は震えていて、こめかみから僕に伝わってきた。

「だ、だめ、止まらない。どうしよう」

思いのほか傷が深く入ってしまったのか、彼女のハンカチは僕の血でぐっしりと濡れた。彼女はすっかり青ざめてしまった。

その顔が見たかったはずなのに。僕の胸は全くすっきりしなかった。

もういい、止血してしまおう。

「これくらい平気だ。自分で止血でき」

「先生！ ジークくんを怪我させたので保健室に行きます！」

「おや、大丈夫かい。気をつけて行っておいで」

彼女は僕の手を掴んで歩き出した。止める隙もなく、僕は彼女に連れられるままに保健室に着いた。しかし中には誰もいなかった。彼女は僕を丸椅子に座らせた。

「ちょっと待ってて」

そう言うと彼女は棚を探して清潔なタオルを持ってきた。ぐしょぐしょになったハンカチをとって、僕の頭に強めに押し当てる。

「……」

自分で止血するタイミングを失った僕は、彼女にされるがままだった。まるで彼女に頭を抱きしめられているような格好。座った僕の目の前には、薄い運動着を押し上げる彼女の膨らみがあった。

「っ」

慌てて視線を上げれば、泣きそうな彼女の顔が目に入った。目に涙が浮かんでいるけど、決してこ

ばれ落ちない。潤んだ瞳に見入っていると、前触れもなくこちらを見た。

「……痛む？」

「えっ？ ああ、いや、それほどでは」

「そう……」

彼女は何か呪文を唱えた。こめかみがひんやりとした感覚に包まれて、鈍い痛みが和らぐ。彼女の「加護」だった。

「これくらいしかできない、ごめん」

「……ああ」

彼女は申し訳なさそうにしていたが、一方で僕はすっかり惚^{ぼろ}けていた。僕の加護には到底足元も及ばない。それなのに、どんな一流の魔術師でも、国一番の治癒師の加護でも感じたことのない気持ちよさだった。

目的を忘れて、僕はただただ彼女の手当てを受けた。そして血が止まった傷口に彼女が丁寧にガーゼを貼り付けて、いつの間にか手当てが終わってしまった。

部屋に沈黙が満ちる。彼女のあまりに落ち込んだ表情に、なんといいかわからなかった。

「……あんたなら避けられたでしょ、あれくらい」

沈黙を破ったのは彼女だった。僕を見ないまま彼女は責めるように言っただけ、いつもの勢いはまるでなかった。

「私の不注意で怪我させてごめんなさい」

彼女は頭を下げた。僕の目的は叶ったはずなのに、僕の胸はじくじくと痛んだ。そんな顔をさせたわけじゃなかった。僕が卑怯な手を使っただけだ。

「先生には私から言っておくから、よくなるまで休んで」

素直な彼女は僕を疑うこともせず、泣きそうな顔のまま保健室を出て行った。思わず追いかけてそうになったけど、追ったところでかけられる言葉なんて今の僕にはなかった。

その日から、彼女は僕を避けるようになった。避けるようになったというか、今までことあるごとに授業で挑んできたのにぴたりとなくなった。いつも試合を持ちかけてくるのは彼女だったから、それがなくなってしまうば僕たちの交流は途絶えた。

全く清々した。あの生意気な人間がしおらしくしている。僕を見ても申し訳なさそうにして、近づいてこない。

この距離感こそ正しいのだ。

このまま一年生が終わって、僕たちの間には何もなくなるんだろう。

ある日、渡り廊下を歩いていると、向こうから彼女が歩いてくるのが見えた。しばらくして彼女も僕に気づいたらしい。

しかし、彼女は僕を認めるなりくると方向転換して、早歩きで逃げて行った。

「は？」

その瞬間、僕の中で何かが切れた。指を鳴らし、彼女を先回りして「転移」する。

「きゃあ!？」

突然目の前に現れた僕に、彼女は止まれないままに飛び込んできた。僕は彼女に逃げられないように腰に手を回して、もう片方の手で手首を掴んだ。

「ちよっ、ちよっと! なんのつもり!？」

彼女は僕の腕の中から見上げてきた。久しぶりに近くで見る彼女に、気持ちが浮つく。困惑した彼女はそんな僕に気づかず、ジタバタとがいた。

「は、離してよ!」

「なんのつもりとは僕の台詞だ。貴様、勝ち逃げするつもりか」

「え?」

「僕から一本取っておいて、僕ともう戦わないなど卑怯だ」

「あ、あれは一本取ったとかじゃなくて、私のミスだったから……」

「関係ない。勝ったものは勝ったんだ。貴様のミスごときに僕は負けたとも言いたいのか」

「そんなつもりじゃ」

「僕を愚弄するつもりがなければ、僕を避けるな。今まで通り勝負しろ」

「でも……」

彼女はなかなか強情だった。

こうして腕の中に生意気な彼女を閉じ込めているのも楽しいが、いつまでも避けられればなしでは困る。

「傷を気にしているのか」

「……もうよくなったの?」

「僕を誰だと思っている」

僕は彼女の手を取ると、こめかみに当てさせた。

「この通り完治している。僕を軟弱な人間と同じにするな」

「よかった……」

「!」

彼女は安心したように笑った。それは初めて見る優しい顔。いつの間にか見惚れていた。

「いつまでくっついてるのよ!」

「っ!」

不意を突いて彼女は僕を突き飛ばした。

「何をす……」

「明日の演習、私と勝負しなさいよね!」

僕に人差し指を突き立てると、彼女は颯爽と去って行った。

「……くっ」

結局彼女は僕に対する敬意なんて全くなくて、生意気に戻ったけれど、避けられるよりよっぽどよかった。

二年生になって、僕たちはクラスが離れた。うるさい人間がいなくなって、静かに過ごせていい。時折見る彼女は、友人に囲まれて実に楽しそうだった。廊下で笑いながら会話しているのをよく見かけた。

あんな笑顔を僕は向けられたことがなかった。

「ふん、僕には関係ないがな」

そうしてなんとなく味気ない二年生を過ごして、三年生で再び彼女と同じクラスになった。クラス表に彼女の名前を見つけた時、僕は少し浮ついた気分になった。そしてふと視線を感じて横を見ると、心底絶望した顔をした彼女だった。思わず顔をしかめて睨み返す。僕と同じクラスはそんなに嫌なのか。まあいい、そっちがその気なら期待に応えて勝負するだけだ。

そうして僕たちはまた騒がしい一年を過ごした。

学園での生活は矢が飛ぶように過ぎて行っているのか卒業だ。

入学当初は通う意味などないと思っていたのが嘘のように、振り返れば様々な出来事があった。

きつとルドヴィガスが僕にさせたかったのはこういうことだろう。

おかげで、国に戻っても僕の胸には学園での輝くような思い出がある。

一つ心残りがあるとすれば、彼女だ。学園に通わなければ出会いもなかった人間。最後まで生意気だったけど、もう二度と会わないと思うと少し惜しい気がした。

ルドヴィガスに言われて渋々来たパーティー当日。

せっかく卒業パーティーに来たのだから、最後に一言声をかけようとした時、突然ルドヴィガスが現れて預言を残して行った。

「彼女が僕の妻……？」

全く考えていなかったことに、驚きで動けなかった。ざわつく胸は、戸惑いか、喜びか、衝撃を受けた頭ではわからなかった。

目の前にいた彼女は、盛大に顔を引きつらせている。それを見て僕の胸は痛んだが、おかげでだんだんと冷静になってくる。

ルドヴィガスの預言は絶対なのだ。

僕や彼女がどう思おうと、これだけは決まりだ。

僕は彼女を国に連れて帰る。

そして彼女は……モニカは僕と結婚する。

「ふう……」

長い結婚式が終わり、僕は寢室で彼女を待っていた。式の間、彼女は僕の腕に縋ってずっと緊張していた。顔に出さなかっただけ上出来だ。

部屋を歩き回りそうになるのを我慢して、ベッドに腕を組んでじっと腰掛ける。

一か月ぶりに見た彼女は、純白のドレスに包まれてまるで聖女のように儚げに光り輝いていた。

勝手に緩む顔に力を入れれば、彼女に変な顔をされた。一言でも綺麗だと言わなかったことを今さら後悔する。

そうこうしているうちに部屋がノックされ、彼女が入ってきた。恐る恐る部屋の中に入ってくる様子は小動物か何かを見ているようだった。

「不本意とでも言いたげだな。人間風情が」

口ではそう言ったが、可憐な白の夜着を身に纏った彼女に釘付けだった。

「私はそっちの都合に付き合っただけだよ。ドラクトルの王子様？」

思った通りに彼女は言い返してきたが、緊張しているのかいつもの勢いはない。突然異国に連れてこられて、好きでもない同級生の妻になるなど、不本意で当たり前だ。

心は痛むが、それでももう覆せない。そして僕も妻を迎えたからには、竜人として、王太子として、夫として、彼女を愛する責務を果たすだけだ。

彼女を抱き寄せて唇を奪う。式の時にしたのでは足りなかったから、思う存分その柔らかさを味わった。硬く強張った体を少しずつほぐして開き夜着を取り払えば、すべやかな素肌があらわになった。綺麗な体だった。自分にはない滑らかさときめ細かい肌。時を忘れて見惚れていると、彼女は恥

ずかしさで涙目になっていた。焦った僕は自分も脱いで肌を晒した。彼女に自分を触らせれば、柔らかい手が腹を這ってぞくりと何かが走った。

もう自分が止められなかった。彼女の体をまさぐって、キスをして、弱いところをぐずぐずにする。そうしてやっと彼女の中に入れば、あまりの気持ちよさに気が遠くなる。組み敷いた彼女は目を潤ませて、健気に僕を受け入れていた。

「ぐっ」

過ぎる快感に、力を込めて耐える。ここで乱暴にするわけにはいかない。目を閉じて耐えていると、頬が柔らかいもので包まれた。見れば僕に揺さぶられながら彼女が手を伸ばしていた。

「ごめん、いたい？」

「うっ」

生まれながらの強者として人々を従え、守る、それが僕の義務だ。当たり前前に体に染み付いたそれは、僕にそう生きるよう示してきた。

あの時彼女にかけてもらった加護の心地よさに、合点がいった。僕に染み渡ったのは、彼女の分け隔てない対等な優しさだ。

自分より遥かに弱い存在。

それなのに、今もこうして自分よりも僕の心配をしている。抵抗せずにこの国に来たのも、きっと誰かのためなのだろう。

善性を持った、普通の人間。その普通が僕からすればどれだけ輝いて見えるか。

「痛いわけ、ないだろ」

僕に当ててくれた手のひらが神々しくてたまらずキスをすれば、彼女の中が僕を締めた。なんとかわいらしいのか。つられて僕のものも熱を増した。

種族が違えば子は授かりにくい。僕は祈るように彼女の中に精を放った。

僕たちの子供に早く会いたい。

僕らは預言で結ばれたが、そんなことは関係ない。結婚して、夫婦になった。

彼女はもう僕のもので、僕も彼女のものだ。

第二章 新婚旅行

「今からおよそ五千年前、人々の中に魔力を持つ者たちが現れました。当初はそれをただの攻撃手段としてしか扱えなかったようですが、やがて火を点ける、水を操る、物を浮かせるといった、日常的な行動へと応用されるようになったのです」

まるで教本をそのまま読み上げているような、抑揚のない声。先のとがった耳、大きい目は鋭いのにとどこか可憐だ。

「そうした魔力の応用を魔術として体系化し、文明の礎と成したのが我が王国ドラクトルの始祖、ドラクシアス様でいらっしゃいます。ドラクシアス様は、現在のドラクトル南西部にあたる地にて、魔石の鉱脈を発見されました。その後、魔石を用いた安定的な魔力供給が可能となり、魔術は広く普及していったのです。そして今日に至るまでに、この世界に生きる者は例外なく魔力を有するようになりました。魔石が無くとも人々は魔術を使えますが、殿下もご存じの通り魔力装置や魔力の治療などに必要なため、現在も魔石の鉱山は稼働しております。竜人のみならず、獣人、エルフ、そして殿下のように人間まで魔術の恩恵が平等に与えられているのは、ひとえに、ドラクシアス様の高潔かつ寛容なご意思の賜物なのです」

「な、なるほど」

言葉遣いは丁寧だ。だからこそ人間に対する棘が際立っている。内心ひやひやしながらとりあえず